共同体の地理的規模

水津一朗

〔要約〕共同体の立地する地域の面積・人口には一定の法則がある。ムラから国家共同体に至るまで、各位相の共同体のテリトリーの結合様式にも、一定の秩序と組織がある。別稿「地域の階層的結合について」（地理学評論二八の六）の立場を、表題の観点から新しいデーターを用いておしすすめたのが本稿であり、世界諸国のムラ・グン・クニ等の進化と地域組織の関係、その空間規模のローカルな変化、自生的地域共同体と制度的地域共同体のからみ合い等をとりあげつつ、人間共同体に対する地域論的アプローチを試みる。

なお、ここで地域とは、自然・景観・人間共同体の organized whole であり、それ自体広義の共同体である。かつて「社会」が発見されたように、筆者は「地域」的事実を追究する。

一　ムラ以前

「個人」を発見し、「社会」を把握した近代人は、何故「地域」の発見にはおくれをとつたのであろうか。

二〇世紀初頭のフランスでは、デュルケームの主宰する社会形態学派が、ドゥ・ラ・ブラーシュ一派の人文地理学派と社会の物質的基体 Substrat matériel の位置づけをめぐつて、はなばなしい論争をかわした。[1] 当時、社会形態学派がとりだした事例の一つが、土地なき社会、トテミズムの非地縁性であり、中部オーストラリアの未開部族、アルンタ族トテムグループの血縁性であつた。

両学派の論争については、すでにフェーブルが次の審判を下している。[2]「自然的根抵をもたない社会、即ち『形態』のない集団がありとすれば、形態学自身成立しないではないか。非地縁的グループにおいても、その成員が地表で日常生活を送る以上、そこには気候があり、生産物があり、かれらが別種の地域集団の構成要素たるかぎりにおいて、占居している場所に固有の生活条件がある」。

民族名	人口密度 平方マイル	band, horde の平均人口	その面積 平方マイル	摘要
平原インディアン		数100—3,000		Barnow. 季節的，夏のみ凝集
カリエラ族（西北濠州）			100（海岸）150—200（内陸）	Radcliffe Brown. トテム文化複合体をなす
オブジブワ族（カナダ）	1/5	241—95	100—1,000	Speck. family hunting group がより重要（2—4平方マイル）
ムルジン族（北濠）		100		Warner. 雨季には分散
ユロク族（カリフォルニア）		200以下		Lowie
北西ブッシュマン		50—60		Steward
コンゴー・ネグリート		60—65		〃
セマング	1/2—1/3	35？	150	〃
西オーストラリア	1/5	30		〃
南オーストラリア		40—		〃
ビクトリア地方（濠）	1—1/5	50	750	〃
クインスランド（〃）	3—10	30	100	〃
ヘルバート川（〃）	1/5	20—25	100	〃
タスマニア	1/3—1/13	30—40	350	〃
オナ族（南米）	1/4—1/5	40—120	410	〃
ミウオク族・ルイセノ族(加)	1	50	50	〃
ディエグゥエゴ族	1/2	50？	50	〃
南ブッシュマン		100—150		〃
アンダーマン	3	50	16	〃
モンタニェー族	1/5—1/35	44—70	250—10,000	〃
プノブスコット族	1/17	400	10,000	
北パイウテ族（大盆地）	2.3(100km²)	100—	130—300km²	Forde. 冬のみ集合
ヨクート族（カリフォルニア）	28—107 (100km²)		775km²	馬淵（人類の生活）定住
マイドウ族（〃）	81—28 (100km²)	150—250	259km²	〃
内陸オーストラリア		35	20—6,000	D. S. Davidson. 鈴木（未開人の社会組織）

別表Ⅰ　未開社会の band および horde の規模

アルンタ族の居住地は[3]六つの大地域区画に分れ、さらにそれらがアリス・スプリングを根拠とするチョリチジャ族をはじめ、七三箇の地域集団に細分される。トテムグループはインターリージョナルなものではあるが、その結合力は、まず自己の所属する地域集団内で最も強く、他集団に至るにしたがつてゆるくなる。トテムグループの儀礼も、まず自己の生活地盤内の成員を主体としていとなまれ、他の地の同一トテム成員を吸合する度合は、そのグループの経済力の度合、トテム中心の畏敬の強弱による。かくて野猫をトテムとするグループ(アチルパ)も、部族をなべてただ一つあるのではなく、イマンダのアチルパ、某地のアチルパ等、居住の中心地域名をつけてよばれる。かつ今日では、一見こみいつたトテム規制自体が、未開な技術的制約下において、食糧調節の機能を果していることさえ指摘されている。

ところで、未開社会の日常生活を規制する基本的生活空間として、ホルドやバンド等の立地するテリトリーのある事実が、ウィスラー、ラドクリフブラウン、スチニワルト等によつて指摘されて以来、氏族的血縁組織をもつて社会結合の基本とするモルガン流の考え方は、多くの修正をうけてきた。[4]いま、手許にあるデータによつて、諸未開部族のホルドやバンドの面積、人口を整理すると（別表I）、これら基礎集団の規模は、平均二五〇平方キロメートル以下、一三〇〇平方キロメートルをこえることは稀れで、人口も約五〇人程度、一〇〇人以上は多くない。未開な技術的制約下における生産活動は、この程度の空間的制限内で最もスムースに行われうるのであろう。ただ移動傾向の強い猟獣を主食とするステッペ地方では、より広い土地とより大きい集団を必要とする。

しかし、これらの集団が一定のテリトリーを限り、その土地や産物について共同占有権をもつとしても、その空間は季節的に伸縮し、定住集落もない点からすれば、これは「ムラ」以前の現象にすぎない。

① E. Durkheim, Les Règeles de la Méthode sociologiques, 田辺寿利訳、社会学的方法規準。および L. Febvre, La Terre et l' Evolution humaine, Introduction geographique à l' Histoire. 飯塚浩二訳岩波文庫版八七頁以下。

② L. Febvre, ibid.

③ 拙稿、トテミズムと地縁性—未開社会の地理学的試論、古文化、昭二三。

④ 杉浦健一、未開人の政治と法律、昭二二。八九頁以下。

二　ムラの規模

未開社会において、「地域」の原初形態を発見したわれわれは、つぎに農耕社会のテリトリーを追究しなければならない。農耕生活における生活空間の単一環節地域（基礎地域）としては、原則的には一集落を核として、その周囲に生産用地・交通路その他の人間的設営物や自然的事物がアンサンブルをなした不可分の統一体[1]をとり上げる。この

		国名	200人以下	200人 499人	500人 999人	1000人 1999人	2000人 4999人	5000人 9999人
I群	二九人が最多の国 二〇〇人—四九九人の人口凝集体	スウェーデン	—	52	22	12	7	2
		北アイルランド	5	44	20	9	8	4
		チリー	—	70	16	5	4	1
		エスラエル	29	43	11	3	5	2
II群	多の国 五〇〇人—九九九人の凝集体が最	コスタリカ	3	22	27	19	11	4
		エルサルヴァドール	3	18	32	23	14	4
		アフリカ連邦	8	13	18	23	21	7
III群	最多の国 九九九人以下の凝集体が	オランダ	60		16	11	6	2
		デンマーク	40			26	14	2
		ノールウェー	85			4	5	1
		米国	52			23	9	6
		キューバ	68			22		4
		ブラジル	77				13	4
		アルヂェリア	27		39		18	5
IV群	二が最多の国 二〇〇人以下の凝集体	アイスランド	47	26	9	6	6	2
		アラスカ	78	12	4	2	1	1
		メキシコ	86	7	3	1	0	0
		グリンランド	88	8	3	—	—	—
		アルゼンチン	49	20	13	10	8	2
		インド	67		18	8	3	0
V群	一九人が最多の国 一〇〇〇—九九九	ポルトガル	—	—	—	—	66	221
		スコットランド	—	—	—	36	39	14
		プエトリコ	—	—	5	17	43	16
		ヴァージン島	—	—	—	33	33	—
		北ローデシア	—	—	—	—	11	—

別表 II　人口階級別人口　凝集体の分布比率（数字は国別百分比）
Demographic Yearbook. 1952 から算出

統一体は、明治以前、わが国でムラ（概して今日の大字）とよばれ、[2] ドイツで Ortschaft とされるものであろう。

「世界人口年鑑」Demographic Yearbook は、世界諸国の地域単元をa, b, cの三項に分類し、国別に各地域単元の分布数を人口階級毎に記載する。aは行政区画を無視した人口凝集体。bは行政市町村。cはそれ以下の行政区画を単元とするが、これはかならずしも行政機関をもたず、人口凝集体との符合を吟味するのが困難な場合がある。これらの地域単元を、ただちに前述の生活基礎地域と同一視することはできないが、少くともaおよびabは比較的これと近似する可能性が多い。

そこで、aおよびab分類について、別表Ⅱから次のことが判明する。[3] (1)各国とも一、九九九人以下の人口凝集体が圧倒的に多いこと、(2)五六%の国では九九九人以下（過半数が二〇〇人まで）の頻度が、国内人口凝集体の大半を占めること、(3)別表Ⅰ、Ⅱ群の国では、二〇〇人以下が激減し、一〇〇〇人以上は漸減し、(4)各群別に、頻度率のカーヴに近似した傾向がみられること。これらの理由をここで速断することはできないが、少くとも基礎地域の規模に、ある法則性の存することは予想できる。

一八七〇年代のわが国については、日本地誌提要[4]を利用しうる。それによると、別表Ⅲのように二〇〇人―四九九人のムラが全体の五七%をしめる。現在については個別調査による外ないが、大阪市大地理学教室の奈良県二階堂村調査によると、三二大字の人口規模は、二五〇―三五〇人

別表Ⅲ クニ別平均ムラ人口数（日本地誌提要、明治10、から算出）

平均ムラ人口数	クニ名	総計
人 人 100― 199	讃岐・周防・長門・肥後	4
200― 299	若狭・大和・越前・越中・丹波 但馬・伯耆・壱岐・対島	9
300― 399	美作・越後・加賀・能登・丹後 播磨・豊前	7
400― 499	河内・佐渡・紀伊・土佐・石見 隠岐・備前・備中・肥前・因幡	10
500― 599	出雲・筑前・筑後	3
600― 699	和泉・淡路	2
700― 799	伊予・豊後	2
800― 899	摂津・備後・大隅	3
900― 999	阿波・日向	2
1000―1099	山城	1
1100―1199		0
1200―1299	安芸	1
1700―1799	薩摩	1

のものが最も多く、それ以下のものは漸減し、以上のものは急減する。また集落名その他からおして、以前は同一集落をなしたと思われるものを合算すると、四〇〇人以上の大字があるが、現在これは二個の大字に分裂している。[5] 同じ平野の村でも北陸砺波扇状地の散村地帯[6]では、四〇戸―二〇戸、二〇〇人―一〇〇人が六三%をしめ、奈良盆地の基礎地域よりスケールが小さい。奈良盆地にくらべて後進的な砺波では、人口密度が稀薄であり、かつムラのコミュニケイションが散居のため集村居住より円滑をかく面多く、必然的にムラの縮少を招く。[7] その南に位置し従来隔絶山村をなした五カ山では、その平均規模はさらに縮少する。[8] ここで外国の諸例を加えると、ソ連のコルホーズの平均戸数七八戸[9]、一六歳以上の人口一六〇人、南ドイツのレス地帯の泉に凝集するゲヴァンドルフでは普通五〇〇人前後、[10] ハンガリアやユーゴスラヴィア、南欧の百姓町に至つては数万人に達する。[11]

しかしこの百姓町のごとき特殊事情（外敵防禦と強度の乾燥）をもつものおよび散村を除けば、ムラ人口は、ほぼ二〇〇人―五〇〇人をスタンダードとして、秩序のある振幅を示していることが、一応結論される。かかる法則性は、飲料水の多少等の自然条件と共に、一定の歴史的背景下におけるコミュニケイションや生産能率、さらにムラの統率能力に空間的限界性のあることから成立するとすべきであろう。オトレムバは、[12] 農業集落の戸数と屋敷・耕地間の距離との間に相関関係があり、人口が所与の耕地面積内で強く成長すると、保有地分散が極端化し、作業能率は低下し、かつ農業生産による人口支持限界をふみこえる結果、非農要素の出現、分村の発生をみることを指摘している。病的に膨脹したハンガリアやギリシア農家の「二次的分散」も、この点から理由づけできる。[13][14] なお砺波の場合については、筆者の計算では、非農的要素を含む消費・不完全農家戸数を除いた場合、各部落の完全農家戸数とその総経営面積との間には、見事な比例関係がみられることが判明した。

① 人間共同体を含めた文化景観諸要素が integrated wholeをなす最小単位とみてよい。

② 鈴木栄太郎氏は、社会的諸現象の地域的累積体としてのムラを指摘している。鈴木、日本農村社会学要論、昭二四。三八頁以下。

③ Demographic Yearbook, 1952 年版を使用した。ab 分類は、a と b の重なつたもの。

④ 京大教養部所蔵の日本地誌提要によつたため、関東、東北の分を缺く。以下同じ。

⑤ 村松繁樹・川喜田二郎、人文地理学入門、昭二六。三六八頁

⑥ 大阪市立大学地理学教室栃波共同調査における筆者の調査結果による。

⑦ M. Mayr は、北東チューリンゲンとバイエルンの二つの山間盆地において、集村居住の前者は、一 Ort 平均四八二人、散村居住の後者は、平均八九人であることを指摘している。Die Siedlungen des bayerischen Anteils am Böhmerwald, Forschungen zur deutschen Landes-und Volkskunde. 1911, S. 410

また同じバイエル地方について、集落の二次的分散が行われた地方ではムラ面積が小さく、然らざるところはムラ面積が大きいことも判明した。従つて行政村においては、前者の方が多数のムラから構成されている。G. Endriss, Die Vereinödung im Bayerischen Algäu, Petermanns, Geogr. Mitt. 9, 1936. S. 279

同じく散村や小村の卓越するスペイン、ガリチア州においては、スペインの地理学者 Dantin Cereceda の一九二〇年の調査によると、約二五一〇〇のムラ parroquia, feligresia の中、九五パーセントが二〇〇人以下、五二・五パーセントが五〇人以下、面積は平均一・二平方キロである。なおこれらの分散集落 poblacion diseminada の成立は主として一八世紀から一九世紀初頭にかけての土地改革で成立したものである。G. Niemeier, Typen der ländlichen Siedlungen in Spanisch-Galizien, Z. G. E. B, 1934. S. 161—165

⑧ 大阪市立大学地理学教室五カ山共同調査による。

⑨ 的場徳造、ヨルホーズ、昭二九。六三頁—六四頁。

⑩ R. Gradmann, Süddeutschland, 1, 1931.

⑪ A. Demangeon, La Géographie de l'habitat rural, Ann. de Géogr. 36, 1927. A. Philippson, Das Mittelmeergebiet, 1907. S. 214—216. 乾燥度が増せば、人口は湧水点に凝集する。ドナウ平原・南欧の百姓町は、防禦と乾燥の両面から極度の凝集を迫られた。乾燥集落の極大は、かのオアシスタウンである。

⑫ E. Otremba, Allgemeine Agrar-und Industriegeographie, 1953.

⑬ E. D. Beynon, Migrations of Hungarian Peasants, Geogr. Rev. 27, 1937 または L. W. Stanley, Some Aspects of Tanya Settlement in Hungary, Scottish Geogr. Magazine, 51, 1935. A. Philippson, ibid. S. 216

⑭ 共同体の空間規模の合法則性については、その他 L. Mecking, Die Flächengröße politischer Räume und ihre geographische Gesetzmässigkeit, Petermanns Geogr. Mitt, 1938 を参照のこと。なお、分村と親村との領域関係については、A. Welte, Die Bedeutung d. Ortsgemarkungen für die Siedlungsgeographie, Geogr. Anz. 7, 1935 が、歴史地理学的分析にくわしい。

三　ムラとムラの結びつき

かかる「地域種」たる基礎地域は一つの Superorganism たるべく、その内部の構成要素は、人間を卓越種として機能的に結合した広義の共同体をなす。共同体を人間の間柄にのみかぎるところに、社会科学の抽象性が生まれ、「地域」はついに発見されずに終ることとなる。人間の土地への働きかけの堆積の挙句、この Superorganism の原形質として神社・仏閣等の聖所が生れ、土地は精神的風土に昇華する。[1] テーニスはそのプロセスを、次のごとく説明する。「土地はその生産性を通して人間生活の自然的基盤であり、一切の母なる大地としてわれわれもそれに共属依存する生活空間である。共同居住 Zusammenwohnen に基づく所謂近隣関係 Nachbarschaft によつて、かれらの生存を決定的に支配する地霊、産土神、土地爺、土神または産神の共同崇拝にまで深まるにしたがい、一定地域への共属が、かれらを横断的に結合して運命共同体にまで形成するであろう。エジプトのイシス、ギリシァのデメーテル、ローマのテルルスにおけるごとき。」

ところで、かかる単一環節地域はいかに相互に結びついて、より高次元の地域共同体（多環節地域）を構成するのであろうか。小地域群の並列的集合において大地域をみる考え方が、根強く地理学的思考を支配している。生態学派は、地形的・生態的に同質的な最小地域統一体 kleinste topographisch-ökologisch-biocoenologisch homogene Raumeinheit を Biotop とし、地表は種々の Biotop 群のモザイクであるとするが、[2] これも伝統的な機械論の域をでるものではない。別稿[3]で指摘したアンステッドの人文地域も、かかるメカニズムをこえてはいない。シュミットの文化圏[4]説にせよ、ウィスラーやクローバーの文化地域[5]のアイディアにせよ、人類学の畑でも、圏や地域相互の関係が動的には理解されず、空間的拡がりすら一義的には問題とされない。共同体相互の結びつきがダイナミックであるかぎり、[6] 地域相互の結合も、あらためて力学的に考え直さなければならない。

力学的地域結合理論を考える場合、ラッツェルの力学的運動論が想起される。諸事象の地的分布 die räumliche Verbreitung とは、彼によれば創造中心の運動が沈澱したもの Niederschlag にすぎない。[7] したがつて分布論は、運動理論の力学が、静力学に移つたものに外ならない。[8] 彼に

おいては、地域相互を個別にきりはなして考えることはできなかつた。

ラッツェルの思想は、クリスターラーの考え方にうけつがれる。[9] 地域は交通路を介して結ばれ、交通路は十字路で交叉し、町場となつて結晶する。彼は地域を結合統一せしめる媒介として地域中心 Zentrale Orte を考える。そのフィールドとした南ドイツでは、地域中心は、中心性の度合におうじて七階級に区分される。最低の中心地 Marktsort を中心に、半径約四キロメートルの地域が統合されて M Kreis をつくり、これが数箇集まり、Amtsort を中心に A Kreis がつくられる。かかるプロセスをくりかえして、最後に半径一〇八キロの L Kreis が形成される。

第二次大戦後、その Versorgungsprinzip と Zuordnungs-(Verwaltungs-) prinzip は広くヨーロッパ全土におしひろげられた。即ち、ヨーロッパでは南北三地帯と東西三地帯が交切して、ロンドン・パリ・マドリッド・ローマ・サロニカ・プレスブルグ・ワルソー・ストックホルム・ベルリンを大中心とする九つの下部単位に分れ、各々五〇〇、〇〇〇—六〇〇、〇〇〇平方キロ前後の面積と四〇、〇〇〇、〇〇〇—五〇、〇〇〇、〇〇〇人前後の人口をもつ。そして各地域毎に、前述の各階層の地域中心とその影響圏が設定されるのである。[10]

クリスターラー説の弱点は、ここでは問わない。地域論におけるその功績は次の点である。まず定量的な操作によつて地域結合の酵母としての都市を指摘し、その中心度の階層に応じて、地域が階層的に結合しているのを発見したこと。ここでは、「地域」はキンブルが批判した産業革命以前の残片としての同質的「地域」[11]ではなく、異質的な superorganism 群が力学的に統合された、ダイナミックな「地域」である。かかる階層組織 hierarchischen System をもつ地域的アパラートの上に、人間共同体が地域の主体として密着し、文化がつくられ、伝播し、かつその進化が行われる。[12] クリスターラーの言葉を借用すれば、「経済・文化・政治における全生活・全労働の流れが地域中心に結集する。これらの流れは、多少とも明瞭にかぎられた地域内のあらゆる部分から流れ来り、ここから放射する逆流によつて、地域の残余の都市や村全体に流れる」[13]べきものである。

① F. Tönnies, Gemeinschaft und Gesellschaft, S. 14.

② Tischler, Raheler は、Die Landschaft erscheint bei dieser Betrachtungsweise als ein Mosaik ökologisch verschiedenartiger Biotope とみる。K. Paffen, Zur Methodik ökologischer Landschaftsgliederung, Forschungs-u. Sitzungsberichte. 1950 による。

③ 拙稿、地域の階層的結合について、地評二八の六。

④ 石川栄吉、文化圏序説—文化史的民族学の弁明と批判を通じて—人地三の三

⑤ 拙稿、北米土着文化による地域区分、人地二の四

⑥ デュルケームは、社会種としての単一環節社会が、さまざまな相互結合関係をなすことによって、単純多環節社会（若干の未開部族、ローマのクウリア、アテナイのフラトリア）・単純合成的多環節社会（部族連合）・二重合成的多環節社会（古代都市、Grafschaft）が形成されるとする。デュルケーム、前掲書一九三頁。

⑦ F. Ratzel, Anthropogeographie, Vol. II, S. 141.

⑧ O. Schlüter, Die Ziele der Geographie des Menschen, S. 22

⑨ W. Christaller, Die Zentralen Orte in Süddeutschland, 1933.

⑩ W. Christaller, Das Grundgerüst der räumlichen Ordnung in Europa, Frankfurter Geogr. Hefte, 24, 1950

⑪ G. H. T. Kimble, The Inadequacy of the Regional Concept, London Essays in Geography. 1921 本論文については、拙稿、地域における階層性と異質性、人文研究五の二で、一部紹介した。

⑫ やや主題をはなれるが、ここで地理的運動論をとなえたラッツェルの環境論について、一言弁明したい。彼は、コント・テーヌ理論 die Comte-Tainesche Theorie des Milieu を「哲学的公式化にすぎない」(Anthropogeographie, I, S. 17—18) として、「文化の未発達は、時間的・空間的にあらわれる個性の制限、たとえば、相次ぐ世代と共に、家屋・集落・民族を孤立化せしめるところにある。文化の進化とは、相並んだ生の結合と相継続する連関の中にある」(Völkerkunde, S. 15) としている。彼の環境論は、所謂環境決定論の方向においてだけではなく、位置の変動論においても理解しなければならない。

⑬ Das Grundgerüst, S. 5。拙稿、前掲人文研究五の二は、かかる地域組織を、人間生活の場とみて、人文現象がその地域組織にワクづけられる状態をライン・マイン地方について分析したものである。

四　サト・グンの進化

かかる地域の階層的結合は、大地の断片へ働きかけた、人間労働の歴史的推積の結果形成されたものである。たしかに地域中心は、アルンタ族のトテム中心にみるように、未開社会にも存在する。しかしそこでは、いまだ経済的中心機能の成熟をみない。そこでは、各テリトリーは大森林・河川・沼沢地・沙漠等で幅広く区切られ、内部の社会も孤立的、自律的である。地

域と地域をへだてたこの厚い壁は、時代とともに、交通・経済の発達とともにこわれていく。そして階層的な地域組織が、群立する地域中心を酵母として発酵する。これをマックス・ウエーバー流[1]にいえば、まず習俗を異にする共同体間の生産特化 interethnische Produktionspezialisierung の展開であり、次に市場のための専業化への発達 Eurwicklung Zur Marktspezi-alisreiung これである。

まず、ヨーロッパにおける基礎地域群を包含する多環節的生活圏の成立を問題とする。ゲルマン古代には、vicus 乃至 villa のテリトリーが、「森林におおわれて物凄いか、あるいは沼地がつらなつて荒涼たる」[2]自然の隙間に散在していた。デルブリックの計算によると、[3]紀元初期、ゲルマニアの人口密度一方キロ四―五人で、一村落の平均面積三方マイル、人口七五〇人となる。この人口密度はベロッホのガリアの推定人口密度[4]が一方キロ七・六人（紀元一四年）であつたことからも一応認めうるが、一村落七五〇人は、現在の南ドイツの典型的なゲヴァン集落においても必ずしも小人口ではないし、その境域三方マイルも広大に失する。誤算の発端は、古代の Sippe-vicus と Gau-Hundertschaft の実体を同一視したところにある。[5]

時と所はいささか異なるが、数量的に比較的整備されたイングランドの Poll Tax（一三七七年）州別調査によると、[6]村落共同体の人口ピークが一〇〇人―二〇〇人クラスのものはエセックス・ノーザムプトンシャー・イーストライディングオヴヨークシャー等、五〇人―一〇〇人クラスのものはデヴォン、ノースライディングオヴヨークシャー等で、大部分が一〇〇人前後に落着く。これを一〇八六年のドゥームズディブックのそれと較べると、[7]たとえばオクスフォードシャでは五一人―一〇〇人が全共同体数の二四％から三二％へ、一〇一人―二〇〇人が二七％から三一％へ、スタフォードシャでは、前者が一九％から三一％へ、後者が八％から二六％へ増加している。これらの人口が、中世特有の社会階層をなし、まわりに狭長な地条ののびた開放耕地や共同放牧場のある有核集落を占居し、中世的生活を展開した。この点からも、古代の vicus 乃至 villa の人口をデルブリック説のように大規模には考えがたい。

中世ドイツでは、Hundetschaft は、主として Gau 内に根をはつた地方勢力を背景とした地方伯管区 Grafschaft

下位にある裁判区、Hundertschaftsgericht 管区として成長していく。すでにメロヴィング朝時代、定期的に開かれる定期裁判集会と特別必要に応じて召集される臨時裁判集会とがあり、判決の発見は、各 vicus や villa の全員出席を要した裁判区民 Dingvolk の任務であつた。裁判官は、定期裁判集会ではグラーフ Graf、臨時裁判集会ではグラーフの出席しないかぎりフンノ（百人組長 Huno、元来人民から選ばれたが、後にはグラーフの任命にかかる彼の下役となつた）であつた。その後地方分権の発達にともない封建法・家人勤務法・庄園法等の発達をみることになつたが、原則としては、従来の地方法は、その管轄区内において一般的効力をもつた。[8]

以上のことから、Hundertschaftsgericht 管区は、数箇の ländliche Ortsgemeinde たる「日常生活の小秩序」(Heimpel)——穀草農法あるいは三圃農法経営の主体——を包括した拡りをもち、とくに判決の発見が区内全員の任務とされたことからみて、この区内住民は、共有マルクの利用権であれ、家畜等の売買であれ、婚姻関係であれ、日常接触の機会をもち、ある程度利害を共有するものでなければならない。クリスターラーは、今日の地方裁判所所在地が地域中心として約二—三〇〇、〇〇〇人の人口を管区内にもつことを指摘しているが、[9]古代の Hundertschaft 乃至中世の Hundertschaftsgericht 管区も、その発生上、制度上の性格がいかなるものであつたにせよ、未熟ながら生活の多環節的秩序圏たる Hundertschaftsmarkgemeinde をなし、裁判開催地は、裁判日に開かれたであろう市を介して、漸次地域中心として発達して行くべきものであつた。すでにシーザーやタキツスが指摘し、最近発掘の結果確証された小規模な、周壁をつけた町 oppidum[10] は、かかる地域中心であつたのではあるまいか。かかる裁判区制度が、中世荘園所領関係の交錯によつて、多くのユガミを受けたことを別にすれば、[11]ますます区内住民の共同関心度を強めたことも事実であろうし、かかる二次的生活空間が、やがて一九世紀以降の Kreis やその下位の Amt 等の行政的ワクづけを準備していつたのも疑いえない。

Hundertschaft にはローカルな変化があり、諸文献に huntari, centurio, centenarius, huno, hunteri, pagus kiligo-huntari, villa cunningahunderi, hundred 等の名で記載

されている。イングランドの hundred は、ドゥームズデイブックによると[13]、ミッドランドではその平均面積およびそれに含まれる平均地名数は別表のようになる。これらの地名の中には隣接する二、三の集落が今日同一呼名をもつものもあるが、一応その地名数は当時のムラ tun 数と近似値であつたとみて差支えあるまい。hundred の地名は、数箇のムラや教区共有の共同放牧場の名前や市場町に成長した大集落の名に因んだものが多い[14]。いずれにせよ、hundred は多数の村人が面識接触する二次圏的性格をもち、その中心地は空虚な中世農村群とうつてかわつて、周期的に活気づく市場町的成長をもとげるべきものであつた[15]。

county 名	hundred 数	hundred平均面積	hundred平均地名数	Bourgh数
Gloucestershire	40	80 km²	9	4
Herefordshire	16	136	19	4
Shropshire	14	248	31	1
Staffordshire	5	594	67	3
Worcestershire	12	125	21	4
Warwickshire	10	250	27	1
Leicestershire	?	?	?	1
Rutland	2	194	19	0
Northamptonshire	27	84	12	1

別表Ⅳ　ミッドランドにおける hundred の規模（Domesday）時代

中世における市場圏は、一般に徒歩で市場まで一日中に往復できる範囲内であつた。ディッキンソンの一九世紀鉄道建設以前のイーストアングリアに関する調査によると、市場中心は約三―六キロ間隔で分布する[16]。サクストンの一六世紀州地図記載の市場圏は半径六・四キロ、人口稠密地帯では圏の重複も生じている。またブュッヒァーの推定[17]では、一三世紀頃、ドイツ中世の市場町は総数二、八〇〇、人口は一〇〇人―一、〇〇〇人で、今日の一般的集村にほぼ匹敵する。その市場圏は南西部で九二―一二五平方キ

ロ、中部・北東部で一四七―二六五平方キロ、都市発展のおそく人口稀薄な東部で二五六―四三二平方キロであつた。この程度のローカルな相違は、Hundertschaftsgerichtの管区や hundred の規模にも当然存したとしても、なおこれら諸圏の規模の類似性が注目をひく。

一方、中世にはキリスト教の新しい地域体制が全土をおおつてゆく。大司教所在地を大中心に、司教区・副僧正区・高僧区等の精神的地域が階層的に形成され、最下位の司祭区は、一応基礎地域に該当する。[17] かかる制度はすでに一二世紀、あるいはそれ以前から次第に明らかな形をとつて形成されたものである。ここで直接の問題になるのは、諸司祭区 Pfarre 群を直接包括する高僧区 Erzpriestertum (sedes) の実態である。高僧所在地の中心性は、精神的にはともかく、一般に経済的には低次の場合が少くなかつた。しかしケルナーのチューリンゲン地方に関する詳細な研究にみるように、[18] その所在地は先史遺物にとみ、後期メロヴィンガー朝時代の豪族領地があつたと推定される遺物も出土し、以前から当地方の結節点として、近隣諸村落とは異質的性格をもつていたことが判る。いまエルフルトのマリーエン Marien 副僧正区四四〇〇平方キロについてみると、各高僧区面積は三分類され、最小八〇―一七〇平方キロ、中間二五〇平方キロ、最大五三〇―七六〇平方キロ、平均二四三平方キロとなる。さらに副僧正区や高僧区の画定に際しては、大森林や河川・沼沢地で区切られた古い Gau の境界が踏襲された場合の多いことが指摘されている。

要するにキリスト教の地域組織は、自生的に形成されてきた土着の地域体制に、独特のユガミを示しつつはまりこんだとみることができる。太古以来、ムラを精神的風土に昇華した異教的聖地には、教会が立地し、季節的生活リズムにのつとつた固有の宗教儀礼は、復活祭・聖霊降誕祭その他かずかずのキリスト教的祭典にすりかえられ、やがて祭日が市日と結びつく。

かくて Hundertschaftsgericht 管区や hundred にせよ、中世市場圏にせよ、高僧区にせよ、ほぼ一様にクリスターラーのA・K圏に相応する空間的拡りをもつことが分る。それぞれ独自の機能をもち、ローカルな相違があるのも無視できないとしても、近代交通機関の発達以前、一般にこの程度の空間規模こそ、一日行程の妥当な行動範囲として、

平均面積	北海道	東北	信越	関東	山静	東海	近畿	北陸	中国	四国	九州
199km² 以下	0	2	1	14	1	16	33	5	9	5	14
200—299	0	2	2	10	3	13	17	2	10	8	11
300—399	0	5	2	15	1	5	11	6	21	5	16
400—499	0	13	4	5	3	4	8	6	5	3	8
500—599	0	7	1	12	6	3	4	1	3	4	8
600—699	0	5	4	5	5	2	0	3	5	4	6
700—799	0	7	3	0	2	2	2	1	4	3	1
800—899	0	5	4	1	0	1	0	1	4	1	3
900—999	0	7	3	1	1	0	1	1	3	0	4
1000以上	14	21	8	5	0	5	3	1	2	3	7

別表Ⅴ　昭22. 面積別郡数

ムラ外における共同生活が最も円滑な機能を果しえたと考えられる。交通手段を徒歩におくかぎり、この空間規模が未開社会のホルドやバンド（前述）の一般面積と類似するのも、きわめて自然である。

七世紀、わが国では国郡制度が確立した。これは太古からすでに自主的に形成されてきた地域組織を、政治的に制度化したものとみられる。この制度では、ムラを包含する上位組織は一応郡であつた。今日まで郡界の変更、新郡の設立等があり、延暦年中その数五五五、延喜式で五六〇、倭名抄で五九二、拾芥抄で六〇五、明治二年六三一（北海道の八六郡を除く）とやや時代的変化があるが、現在の郡面積から過去の傾向を推定しても、大過はないであろう。

市町村合併ブーム以前、昭和二二年の全国郡面積は、別表Ⅴのように一〇〇—三〇〇平方キロに全郡の四五％が含まれ（北海道を除く）、前述のヨーロッパの諸圏と近似値を示す点が注目される。五〇〇平方キロ以上の大郡は、東北・信越・関東に多く、一〇〇平方キロ以下の小郡は近畿に多い。明治以前の諸状況をも反映する日本地誌提要によると、一郡中の町数は一—二が圧倒的に多く、一部を除い

ムラ数＼町数	Ⅰ以下	Ⅰ—Ⅱ	Ⅱ—Ⅲ	Ⅲ—Ⅳ	Ⅳ—Ⅴ	Ⅴ—Ⅵ
600以上			越中			越後
500—400		周防				
400—300		長門 肥後				
300—200		紀伊 能登	加賀 肥前			
200—100	播磨	越前 丹後 土佐 豊前	淡路			
100—90	大和 備前	若狭 豊後				
90—80	備中 但馬 丹後	石見 和泉	佐渡			
80—70		筑後 摂津	日向			
70—60	伊予 安芸 阿波	因幡				
60—50	筑前 山城 出雲					
50—40	美作					
40—30	備後 河内 大和	讃岐				
30—20	薩摩					
20—10	隠岐					

別表Ⅵ　国別にみた一郡中の平均ムラ数と町数

（明.10.日本地誌提要から算出）

て郡中のムラ数と町数の間には別表Ⅵのような関係がある。これらの町は市町村制施行前の町で、実質的な商業・交通の中心であり、地域を結晶化する力点に近いものであつた。したがつて、かつて郡は一中心をもつかぎり原初的な都鄙共同圏的性格を具備したであろうし、郡内に二、三の町場のある場合は、これらを中心とする小共同体を副圏として包含し、自らは主圏となることも生じたであろう。また現在の木地節郎氏等の商圏調査[19]から類推するに、周辺僻地の中には、直接的には主圏の生活空間に属さない場合もあつたであろう。鈴木栄太郎氏は、基礎地域の上位単元としての社会関係堆積地区を歴史時代の郷に予想されるが、これは前述の副圏的規模に対応するものであろう。旧藩時代数百年間、郷が政治・生活の二次圏として生きたサンプルとして鹿児島がある。明治一六年、県令渡辺千秋が内務卿に出した伺書にも、「本県管下ノ儀ハ総テ其町村名ノ上ニ郷名ヲ冠ラシメ譬ハ谷山郷何村加治木郷何村ト云フカ如ク往古ヨリ唱ヒ来特ニ旧藩制ノ頃ハ官民共ニ国郡名ヲ称フル事稀ニシテ専ラ何郷何村ト単称

シ」とのべている。藩政時代、各郷には屯田兵式の郷士がすむ所謂麓が設けられ、郷士によつて地方行政が行われてきた。[20] 押野昭生氏の綿密な実地調査により、麓と商業中心とは必ずしも隣接しないことが判明したが、郷が人間共同体の二次圏として存した点は認めうるであろう。

郡は単に行政上、経済上だけでなく、あらゆる生活面において、ムラの外にひろがる地域的単元としての機能をもつた。たとえば婚姻圏をみるに、かつてムラについて通婚が頻繁に行われた範囲が、この郡であり、今日、それが郡をこえて県、さらに県外にも拡大しつつある。[21]

① M. Weber, Wirtschaftsgeschichte. Abriss der universalen Sozial-und Wirtschaftsgeschichte. 1924 S. 117—118

② Tacitus, Germania 5, 16. 拙稿、ヨーロッパ村落の生態、史林三三の六

③ Delbrük, Geschichte der Kriegskunst, 2A. Teil·II.

④ J. Beloch, Die Bevölkerung d. griechisch-römischen Welt. 1886 S. 507, 460

⑤ 拙稿、ゲルマン古代の地理学的諸相、人地三の二。古代・中世の作野共同体を、Gau (pagus) やマルク共同体の範囲と漠然と同一視する説明が多いが、これは後述するように、Gau の広大さから考えて不可能である。

⑥ J. C. Russel, British Medieval Population. 1948 p. 308

⑦ Domesday Book は全集落人口は示していない。Russel, ibid. p. 311

⑧ R. Sohm, Fränkisches Recht und römisches Recht, 1880 久保・世良訳、フランク法とローマ法、二九頁以下。

⑨ W. Christaller, Das Grundgerüst.

⑩ O. Schlüter, Stadt, J. Hoops Reallexikon d. Dtsch. Altertumskunde. 1912

⑪ たとえば、フンデルシャフトは、京フランク・ラインフランク・ヘッセ等では、中世、裁判区および一部はマルク共同体として維持されたが、下ラインでは消失し、その名Honschaftは、古いフンデルシャフトマルク共同体の分割された小村域に転じた。モーゼルランドでは、中世後期、古来の裁判区としてではなく、単に一、二の村落を包括するものにすぎなくなつた。しかし一方、ザクセンの Goschaft(gōscap)やフリーセンの Schulzenbezirk (dēi) は、古いフンデルシャフト共同体をそのまま継承するものである。S. Rietschel, Hundertschaft, J. Hoops Reallexikon d. Dtsch. Altertumskunde. 1912 S. 572—3 による。なお最近、H. Dannebauer, Hundertschaft, Centena und Huntari, Hist. Jahrbuch. 1949 では、フランク時代のフンデルシャフトは、古代のそれを直接的には継承しない新しい形成物とみる。これについては、H. Mitteis, Deutsche Rechtsgeschichte, 1952, S. 45. 世良訳、ドイツ法制史概説、九八頁参照のこと。

⑫ H. C. Darby and I. B. Terrett, The Domesday Geography of Midland England. Cambridge 1954

⑬ L. D. Stamp, The British Isles, London 1933 p. 561

⑭ ドゥームスデイ時代には、hundred の中には地域的まとまりをなさず、一部散在するものもあつた。これは、当初地域的統一体として出発したものが、時代の経過とともに、中心勢力としての寺院、その他の地方豪族の強大化により、他の hundred にも所領をかく得して自己の hundred に併合し、hundred 自体は所領関係の空間的反映となる。わが国中世の私郡と対比できる。

⑮ R. E. Dickinson, City Region and Regionalism. 1952 p. 78 前後。市場に関しては、Markets and Market Areas of East Anglia, Eco. Geogr. 1934 参照のこと。

⑯ Bücher, Industrial Evolution, tras. Wickett. p. 119—21.

⑰ ここで一応というのは、たとえばイギリスの場合、各集落 vill が教会をもつのが原則であるが、貧弱な地域においては、数集落に一教会が設立された例があり、また荘園関係に影響されて、教区が異常化した場合があるからである。しかし一般的には教区は秩序ある統一体をなし、肥沃な場所では教区が小さく、土地がやせている場合は大きく、かつ教区の形が細長かつたり、不規則な場合は、土地の性質がさまざまで、水の供給点が一カ所にかたよつていることが多い。いずれにせよ、教区は中世的基礎地域としての性格をもつている。I.D. Stamp, The Land of Britain, p. 14 or 23.

⑱ F. Koerner, Die Kirchliche Verwaltungsgliederung Mitteldeutschlands im Mittelalter und ihre Auswertung für die Geschichte der Kulturlandschaft. Petermanns Geogr. Mitt. 94, 1954

⑲ 木地節郎、農村地域の聯売慣習とその小売商圏、同志社商学七の二

⑳ 児玉幸多、近世農村社会の研究、四四一頁以下。

㉑ 婚姻圏に関する論文としては、次のものを参照した。鈴木栄太郎、農村における通婚地域について、社会学第三輯。小山隆、村落における婚姻と家系の調査、社会学第一輯。瀬川清子、関東地方の鄙村に於ける婚域と夫婦の年齢差について、社会学第四輯。岩田慶治、家族と村落構成の変化過程、人文研究三の四。関口武・森藤勝、村落通婚圏に関する諸問題、地評一九の八、一九の一一。山本登、山村共同の封建性・平等性、社評一。山本登、通婚関係より見たる山村共同体の封鎖性と平等性、社評三。

五　クニの固成

しかし地域や地域中心はスタティックなものではない。むしろ「地域と地域中心間には休みない相互作用が成立し、中心が位置と意義をかえ、固定した自然的所与に適合し、[1]」「中心地と地域間に平衡 Gleichgewicht が訪れたとき、ついにある休止が生ずる。ここから歴史的中心地をもつ歴史的地域 historischen Landschaften が成立する。中心と地域はかたくからみあつた機

能統一体 Funktionseinheit であり、中心の崩壊・成長・衰退または繁栄は、地域の形成や生成に作用し、また地域の縮少・拡大・貧困化・固定化は、中心の大きさ、力に影響する。[2]」hundred がチューダー朝を最後に消滅し、後述する county が前景にあらわれたのも、郡が時代とともに増加し、やがてその機能を失つたのも、かかる力学と無関係ではない。

古代ゲルマンにおける生活空間の上限は、民会 Landesgemeinde を構成する civitas のテリトリーであつた。紀元初期、civitas の人口は、平均約一五、〇〇〇人―二〇、〇〇〇人前後と推定される。[3]その後 civitas の分解・離合が行われ、フランク王国 Regnum Francorum はじめ多くの種族国家 Stammstaaten が誕生する。ここにクニの原初形態がうかび上つてくる。

このクニを祖型として、ドイツでは大公国 Herzogsdynastien が群立し、さらに自然的単元や、Grafschaft, 大司教区等にワクづけられながら、歴史的力学関係の中から所謂 historische Provinz が修理固成されていく。これは、家屋形態・建築様式・伝説・習俗等の歴史的類似性、共属意識等に根ざした文化共同体を構成する。[4]たとえば、バヴァリアは、一八一五年、二つの司教区を加えた外は、旧地方伯管区を守つたし、オーデンヴァルトやスペサルト西部、フランクフルト周辺のライン平原北端は、一八一一年、五つの政治単元の出現をみたが、社会・文化的にはマイン川の舟航を介して、ヘッセン・ナサウなる結晶体を共有し、フランコニア公国の心臓部を維持しつづけた。古きアレマン族のテリトリーたるスワビアは、紛糾と分裂の中世をへて、なお文化共同体は解体しなかつた。ただ一八一五年、アルザス・バーデン・ヴュルテムベルク・ドイツ・スイスに政治的に区画されたが、これまた古い起源に由来するもので、フランコニアジュラ・黒森・ヴォージュの諸山脈にワクづけられている。中部ドイツでは、フランクフルトから北走する交通路に核心をもつヘッセがあるし、チューリンゲンは、エルフトを中心として、チューリンゲン森とハルツ山脈に縁どられ、木工や鍛冶に工匠的伝統をもつ森林文化圏を形成して、一九二〇年までチューリンゲンの国に結晶した。中部エルベ盆地の諸政治単元は、マグデブルグを力点として、鉱物の山脈エルツゲビルゲに経済的繁栄の基礎を確保したサクソニーの国に結集した。北部平原では、サクソニー公国の古い南限が、一七九〇年の地図になお残つているが、この線こそ低ドイツ語・ノルディック人種型および北方文化の南限でもある。低サクソ

ニーは、シュレスヴィヒホルシュタインと西メクレンブルグとともに一つのお国風をもち、その西のウェストファリアとは、その宗教において、その集落型、伝統において、はっきりと区別される。また早くから古代ローマ文化の影響をうけ、ライン川を軸として凝集したライン地方に対して、ウェストファリアが独自の地域性をもつたのはいうまでもない。

これら諸単元の平均面積はほぼ二五、〇〇〇平方キロである。まさしく、これらは国家共同体の原初形態であり、Land の正体である。「景観」の由来は遠く、Landschaft は本来これらのクニの体制を意味したのである。そして各クニの力点として、ミュンスター・ケルン・トリエール・マインツ・ヴェルツブルク・ハンベルグ・アウグスブルグ・パサウ・コンスタンツ・ザルツブルグ等の成長をみる。近世の Länder 群も、原則的にはこの共同体を母胎とし、さらに他を併合することによつて成長したものが多い。そしてこれらは、今日でも行政区画の強力な祖型として残存している。[5]

フランスでは、古代ローマの province 制度が、永く余命を保ち、これと深いつながりをもつ la province、歴史的にいい古された国名 noms de pays が古い個性 paysage と伝統をもつて形成された。ところが、注目をひくのは province の平均面積がドイツの historische Provinz に近似する一二、〇〇〇平方キロであることである。その下位の civitates は約四、五〇〇平方キロで、ドイツの Gau よりやや大きい規模をもつ。しかも Province が、フランス革命以後も、近代的行政区画 département に対立し、反パクしたところに、歴史的なクニのリアリティが証明される。[6]

イングランドでは、hundred の上位地域は county である。これは本来、小王国ケント・南サクソン・中サクソン・イーストアングリア等の領域であつた。その後、湿潤カシ林でおおわれていたミッドランドの土地占居が進み、一〇世紀には、全土にわたつて county が大王国下位の伯領として、中心集落名を county 名として設置された。[7] その後これは、常にパロキアルな実在として、中央集権的な力に抗して一九世紀に至つた。現在の地方自治区としての county は平均二四〇〇平方キロでかなり縮少している。しかしフォーセットの研究[8]によると、ドイツの historische

Provinz に対応する地域としては、イングランドでは、ロンドン・サザンプトン・ノーウィッチ・オクスフォード・ブリストル・プリマス・バーミンガム・ノティンガム・マンチェスター・リーズ・（シェフィールド）・ニューカスルを地域中心とする一一乃至一二の province が設定される。この州面積は、一二、〇〇〇—一四、〇〇〇平方キロ前後で、四—六の county を包含する規模をもち、ドイツ・フランスとの規模の対応関係があらわれる。

日本における郡の上位単位は国である。その由来は古く、典型的な文化共同体として、久しく固有の「お国風」Landschaft をもつた。勿論部分的な区画変化があり、和銅六年備前の六郡を割つて美作をおき、弘仁一四年越前の二郡を割き加賀を建て、明治元年陸奥を分けて盤城・岩代・陸前・陸中を新設したごとき事例[9]があり、国府から城下町や交通都市へと、地域中心の分化をもみたにかかわらず、大局的には自然的にワクづけられた境界に固着しながら明治に及んだ。中世の藩領体制も、明治以後の府県制度も、このワクを無視できなかつた。その平均面積は、イギリスの county やフランスの civitates に対応する三二七一平方キロであつた。所謂 historische Provinz に対応するものは、藩領等の影響でこれより可成り拡大すると思われる。（これについては、別の機会に分析してみたい）

以上所謂 historische Provinz なるもの——地域共同体の上限——は、ローカルなちがいを無視して定量化の立場をとるかぎり、驚くべき近似値を示すことを否定しえないし、その下位にある Gau、civitates、county、国等もほぼ同じスケールをもつ点が注目される。この下位組織は、生活圏がグンからクニに拡大する中間規模を投影するものであろう。

ひとはまず、ムラで生活のスタイルを培い、二次的地域で一定の行動類型を体得し、つぎにクニにおいて「お国風」にそまる。かつて厚いムラの外壁をほとんど出ずにいとなまれた共同体は、所謂 parochial stage of culture[10] をなし、多環節地域は漠然とした識域にすぎなかつた。古代から中世にかけて、多環節地域が生活空間にくりこまれ、小地域中心の群立・階層化を生じ、その力学関係の中から、クニがその識域として浮び上つてくる。ここではじめて、provincial culture[11] の緒口がみ出される。かかる地域

共同体の進化が、封建的所領関係によつて、大かれ少なかれ制約をうけたのを無視しえないが、かかる進化に密着できなかつた封建体制自体、やがて壊滅しなければならなかつたことも事実である。かくてクニ相互に平衡が生じ、民族地域が共同体の生活背景にひき入れられてくる。即ち、地域共同体は、少くとも後述する国家規模Ⅱ群に限定するかぎり、ムラの数平方キロからグンの数百平方キロへ、つぎにクニの数万平方キロへと拡大し、さらに国家共同体（後述）において数十万平方キロに統合される。またかかる進化に即して、ムラ・グン・クニ自体に顕著な生理変化が起るが、[12] これは当面の問題ではない。

①② W. Christaller, Das Grundgerüst. S. 5—6

③ 拙稿、前掲人地三の二。civitas は、たしかに純粋な Landgemeinde ではなく、人的団体 Volksgemeinde としての性格をもつている。しかしそれが周りを荒蕪地帯にとりかこまれた一定のテリトリーをもつたのも事実であり、その内部は、地緑的性格のつよい Gau に数区分されていた。しかも Gau 自体が首長 principes または王 Gaukönig をもつたことからみて、civitas の成立以前に、Gau を生活空間の上限とした地域体制が存したことが推測される。Gau という言葉はいまでもシュワァーベン、スイス、バイエルン等では用いられており、シュワァーベンでは「河水の貫流する森林のすくないところ」の意味をもつ。S. Rietschel, Gau, J. Hoops Reallexikon, 4. S. 124—125

④ R. E. Dickinson, The Regions of Germany. p. 32 以下。なお、大公国の地理的基礎については、N. Pounds, An Historical and Political Geography of Europe. p. 112 を参照のこと。

⑤ W. Christaller, ibid. S. 90 では、やや異なつた区分により平均約一二、〇〇〇平方キロとなる。

⑥ W. G. East, An Historical Geography of Europe. p. 114° 宮本又次、フランス経済史概説、六頁。département との関係については、C. Vallaux, Les aspiration regionalistes et la géographie, Mercure de France, I. 1928（大野俊一訳クゥルティウス、フランス文化論　昭、一七による）に詳しい。

⑦ L. D. Stamp, ibid. p. 562—3

⑧ C. B. Fawcett, The Provinces of England, 1918. or Natural Divisions of England, Geogr. Jul. 1917° シェフィールド州は非常に小さく、したがつてヨークシャー州に加え、バーミンガムとノッティンガム間の境界をやや変更すると、一一区分となる。

⑨ 吉田東伍、大日本地名辞典の国名解説による。

⑩⑪ C. L. White and G. T. Renner, Human Geography, 1948. p. 555 生活空間の狭小性・封鎖性は、そこにすむ共同体成員の地理的視圏の狭小性・主観性を生む。例えば、織田武雄、中世の世界図について、史林三三の四をみよ。未開人の地理像が、totemic topography とでも称すべきものであることについては、

拙稿、未開人の地図、日本史研究七に紹介した。

⑫ ムラについては、人間共同体の側における古代の Sippegemeinschaft から中世の Feldgemeinschaft への移行、近世における Gesellschaft の成立等が、一応考えられる。地域論の側からいえば、低環節地域が多環節地域中にさまざまな度合で融解するという現象が生れる。

六　国家共同体の規模

近世以前のクニ群が吸合され、背景としての民族地域が民族国家、「拡大されたクニ」として成熟するのは、近世以降を待たねばならなかつた。それとともに、民族地域の大地域中心としてロンドン・パリ・ベルリン・東京等の本格的発展がはじまる。後進地域では、クリスターラー的階層組織の一般化がみられる一方、先進地域では、この階層組織をふみこえて、新しいメトロポリタンエリアの形成と膨脹をみるに至る。①

人口と面積の両面から、世界諸国は別表Ⅶのように、七群に大別される。Ⅱ群は、イギリス・フランス・ドイツ・日本およびイタリア等、いち早く近代国家体制をつくつた国家で、前述した地域組織の進化段階をかけのぼり、メトロポリタンエリアの形成もすすんでいる。一八世紀後半から二〇世紀初頭の世界は、この国家群によつて指導された。Ⅳ群は、米国・ソ連・中国・インドで、二〇世紀、とくに第二次大戦後、Ⅱ群にかわつて世界にそれぞれ理想をかかげて抬頭したユニークな国家群である。いずれもⅡ群に比して卓絶した面積と人口をもつ。Ⅰ群は東ヨーロッパ諸国の大半と西ヨーロッパの中堅国家、およびかつてのヨーロッパの植民地や保護国で、いずれも従来Ⅱ群に対して後進的従属的であつた。その面積二〇、〇〇〇―二〇〇、〇〇〇平方キロは、Ⅱ群の近世以前のクニよりやや大きいスケールにすぎない。Ⅳ′、Ⅲ、Ⅱ′等は面積と人口の均衡を失した国家群であり、各々群毎の特色をもつが、紙数の関係でここではふれない。Ⅰ―Ⅱ―Ⅳの系列が、国家発展のコースをさし示している点が当面の問題となる。

かつてⅡ群においてのみ近代的体制が成熟し、さらに現在ではその世界的指導性がⅣ群に推移しつつある原因は何か。この問いに明快な答を準備するのは、トエンビーである。彼は近代国家隆盛の経済的基盤となつた産業組織について、次のように述べる。②「産業組織は、イギリス国民生

面積（単位千平方粁）	人口→			
1,000	カナダ オーストリア アルゼンチン アルジェリア メキシコ リビア ペルシア サウディアラビア ペルー 中央アフリカ連邦 南アフリカ連邦 コロンビア ボリビア IV′		ブラジル インドネシア	ソ連 中国 米国 インド IV
600	エジプト ヴェネズエラ エチオピア トルコ チリー ビルマ インド支那 アフガニスタン III		パキスタン	
200	スペイン スウェーデン フィンランド ポーランド ノールウェー ユーゴ ルーマニア タイ モロッコ パラグワイ イラク フィリッピン エクワドル ニュージランド 朝鮮 II′ ←……1—3,000万人……→		フランス 日本 ドイツ イタリア イギリス II	
20	ギリシア チェッコ ブルガリア アイスランド ハンガリア ポルトガル オーストリア アイルランド デンマーク スイス ベルギー オランダ アルバニア ウルグワイ シリア ネパール ニカラグワ マレー ホンジュラス チューニス ガテマラ キューバ リベリア ヨルダン セイロン パナマ サントドミニコ コスタリカ サルヴアドル ハイチ エスラエル I ←……1—2,000万人……→		←……→ 4,000—10,000(万人) 10,000万人	
	バハマ レバノン バーミューダ バルバドス ルクセンブルグ アンドラ I′ ←……1—200万人……→			

別表Ⅶ　世界諸国の規模（人口と面積別分類）

活の基礎として、一国民国家の枠内で議会的代議政治が定着したのち、グレートブリテンにおいて発明された組織である。ただちに明らかになつたことは、産業組織が効果的に行われうる面積と人口の最小単位 the minimum unit of territory and population は、丁度グレートブリテン程度の地理的規模でつくられた共同社会、また、すでに一八世紀末までにグレートブリテンで民族国家を尺度として作られた代議政治制度があたえていた程度のまとまりと連帯性を有する共同社会であつた。産業主義が、グレートブリテンからヨーロッパ大陸にまで拡大したことが、ドイツとイタリアの国家的統一化を生んだ主原因の一つだつたといいうる。」まさにⅡ群の空間的規模の上で、近代的産業組織がスムースに成長し受用されるデモクラチックな空間的アパラートが準備されたのである。ムラやクニにはりめぐらされていた壁は、民族国家の前にはらいのけられ、生理変化をとげたムラやクニは、伝統と因習を強要するワクではなくて、個性的な自治精神涵養の基盤となつた。[3]（低環節地域の多環節地域への融解）

しかし産業活動が世界的に拡大し、巨大なオートメイションを出現した今日、「ヨーロッパの民族国家――一八世紀においてフランスとグレートブリテンが到達し、一九世紀においてドイツとイタリアが到達した程度の国民国家――は、現在の勢力を包蔵するにしては余りにも小型な、脆弱な容器にすぎなく」なつたのである。即ち、ヨーロッパの矯小化 Dwarfing of Europe、Ⅱ群からⅣ群への転化が生じたのである。一種超国家的なスケールをもつⅣ群の「拡大された国家」は、それぞれ自らの地理的規模に適応するユニークな組織を発見し、あるいは発見しつつある。

いまや生活の識域には、地球が、三次元の世界が浮び上つている。バージェスが、シカゴで分析したごとき巨大都市の生態は、かくして誕生する。[4]

① クリスターラーの geometrisch-hierarchischen Randordnung は、原則的には、メトロポリタンエリアには適用されえない。たとえば、E. Neef は、ザクセン地方において、かつて存したと考えられる規則的中心地の配列が、コンナーベイションの形成によつて解体したこと、N. J. G. Poundp は同じ都市環境のルール地方において、第二次大戦による戦災直後、一時的に小地域中心の機能強化をみたことを指摘している。

③ A. J. Toynbee, Civilization on Trial. p. 113—114. 国家共同

体の規模については、地理学上では、F. Ratzel, Politische Geographie, S. 307 参照のこと。

③ イギリスでは、一八八八年の地方団体法により、カウンティの行政権は新設の公選団体 county council に移り、さらにその後全国は画一的に町部郡 urban district と村部郡 rural district に区画され、公選の郡会 district council を設け、カウンティの統轄下におき、同時に従来の教会区 parish を地方自治の政府単位とした。一方、五万以上の都市は、カウンティバラとしてカウンティから独立せしめられた。町部郡・村部郡は、その起源を古くはかのハンドレッドに、直接には一八七二年の町村衛生区 urban anl rural sanitary districts にみ出しうる。長浜政寿、地方自治、四一頁以下。

ドイツでは、一八一五年、プロイセンの州であれ、各領邦 Länder であれ、その内部が、Regierungsbezirk, Kreis, Amt, Gemeinde に階層的に区画された。この区画は細部の変化を別にすれば、今日まで続いている。R. E. Dickinson, The Regions of Germany, p. 34

ここでイギリスの Parish にせよ、ドイツの Gemeinde にせよ、単なるムラではなく、数ムラの併合されてできた行政村であることを附言しておく。

④ E. W. Burgess, The Urban Community, Chicago. 1926.

七　地域の二重性

ゴドルンドは、地域中心の発達について、スウェーデン、スカネ平野をフィールドに、別稿①で紹介したような理論を発表した。このゴドルンド理論は、原則的にはさきにあげた砺波散村地帯にも適用されうる。

扇状地のエクメネー化にともない、地域中心としての出町・福野・津沢・福光等の市場町の析出が、ほぼ五キロ―六キロの等間隔に行われた。その後明治に入り、資本主義体制の浸潤とともに、これら中心地間のほぼ中央に、御坊町、宮町、荒高屋、太田、矢木、中野、宮丸、三郎丸、苗加等街村形態の補助中心（部落単位で消費戸数いずれも9戸以上、昭和二九年）の漸増をみる。出町―津沢間の御坊町、宮町についてみると、日露戦争前後と第二次大戦直後の二時期が膨脹のピークを示す。要するに、この地方の慣称「シマ」を基礎地域とした同質的農村群は、地域進化の流れの中で、自ら非農的・商業的性格をもつ細い結晶体を析出しつつ、地上に力強いアクセントを刻みつけたのである②。

ここで留意すべきは、スカネ地方にせよ、砺波にせよ、いずれを問わず地域中心の群立は、生活共同圏の縮少化を意味するのではなく、実は前述した共同圏の外への拡大と表裏一体をなしていることである。砺波では、北の高岡と通勤・通商・文化等の面で次第に強く結ばれてきた。

ところで現在、グリーンの調査③によると、最低の共同関心圏

は、ヨーロッパでは第一次大戦後発達したバス交通を指標にすると、一〇、〇〇〇人―一五、〇〇〇人の範囲に平均化されつつあり、その面積も二〇〇平方キロ―二五〇平方キロのノーマルサイズに向う傾向にある。そしてその地域中心と地域間には、次のような平衡関係が形成されていることが発見された。

(1) 中心地の商店数と地域人口（中心地人口を含む）の間に相関関係があり、（南西イングランドでは一商店一一〇人平均）[4]

(2) 地域人口と中心地商店の全販売高の間に $y=0.824x+0.72$、但し x＝人口（千人単位）、y＝年間売上高（百万ポンド単位）の関係がある。[5]

わが国では、昭和二四年、大都市周辺部を除いて町は平野部においては殆んど一〇キロ内外の距離で分布し、それぞれの勢力圏をもつことが判明している。[6]

かかる自生的な地域組織にワクづけられつつ、行政上の地域制度の網がはられていく。自生的なものと制度的なもの、双方の地域が相互に作用しつつ二重にからみ合い、反ぱつと均衡をくりかえすところ、かかる地域の二重性の中から、現実の地域社会の発展が期待される。わが国では、明治初年以来幾度かの改変をくりかえした挙句、ドイツ・プロイセンの行政制度を参酌して、一八八八年、数箇のムラを合併した行政村が成立した。行政村の範囲が、かつての郷社中心の合同である場合の多いこと、[7] 明治以前この範囲ですでに間接的生活圏の萠芽がみられたこと等が指摘されているが、[8] かかる自生的発展方向を法則的にワクづけることによつて、行政村は過去のムラを化石化せしめつつ、みづからは「拡大された基礎地域」としての性格を強化していつた。たとえば砺波では、これらの村役場の所在地が前述の補助中心と重複する場合が多く、補助中心の小商圏は、行政村の境界に限界づけられて発達した。

竹内常行氏は、新潟・富山・石川三県の行政町村面積を二四階級に分類[9]し、富山県では第二階級（三平方キロ―六平方キロ）の町村（全体の四〇％）、石川県でも第二階級の町村（一八％）、新潟県では第四階級（九平方キロ―一二平方キロ）の町村が最多数をしめること、最大頻度の人口階級は富山・石川両県では一六〇〇人から二二〇〇人、新潟県では二八〇〇人から三四〇〇人であること、概括的には三〇平方キロ迄と六〇平方キロ以上の村では、面積・人口に比例関係のあることを指摘している。ところで、日本全国一一、

500人—999人	1000人—1999人	2000人—4999人	5000人—9999人	10000人以上
		ポーランド(38) ブルガリア(27) ポルトガル(66) スコットランド(39)	フィンランド(26) ルーマニア(29) イングランド・ウェールズ(19) ユーゴ(22)	
ハイチ(35) ニカラグワ(31) リーワード島(23) コスタリカ(27) エルサルヴァドール(32)	英領ホンヂュラス(57) ウィンドワード島(40)	ドミニカ(25) パナマ(36) エクワドル(45)		ジャマイカ(66)
		トルコ(34)		セイロン(30) キプロス(33)
ザンジバル(25)	南アフリカ連邦(23)	南西アフリカ(36)	マウリシアス(28)	北ローデシア(66)
6	3	9	5	4

国行政村最頻度人口階級。（　）内数字は国別頻度百分率
Yearbook 1952 より算出

四一二カ町村の平均人口は四、〇八二人（昭、一〇）である。いま世界諸国の行政町村人口についてみ⑩ると、別表Ⅷのように、

(1) ヨーロッパでは大部分が二、〇〇〇人—九、九九九人内に集中し、

(2) アメリカ諸国では五〇〇人—一、九九九人単位のものが五〇％をしめ、

(3) アジア・アフリカでは各単位が不規則に分散し、

(4) 最頻度人口階級のいずれをとわず、各国ともその最頻度の百分率が二〇—六〇を前後する。

資料不充分で断定はできないが、早く近代的体制の成熟したヨーロッパの地域規模の均等性、人口密度の稀薄なアメリカ、新旧体制の混在するアジア・アフリカ等、それぞれの地域的特徴を反映しているとみるのは差支えないし、わが国の行政村が、ヨーロッパのそれにほぼ対応しているのも自然である。

現在、わが国では町村合併が盛んであるが、その本質的意義がつぎの問題となる。前述の砺波では、出町・福野・津沢等が、ここ数カ年間に各々の勢力圏を糾合して、新

	200人	200人—499人
ヨーロッパ		北アイルランド(44)
アメリカ	アラスカ(78)	カナダ(58) リーワード島(23)
アジア	アデン(50)	イスラエル(43)
アフリカ		
総計	2	4

別表Ⅷ　世界諸
Demographic

市・新町としての新行政区域を形成した。新市ブームのはじまった昭和二八年一〇月から三〇年四月までの新市（二〇三）の全国平均人口三八、七八九人、平均面積は一四〇平方キロ、その中地域中心の群立している京浜（東京・神奈川・千葉・埼玉・群馬・茨城）と京阪神（大阪・兵庫・京都・滋賀・奈良・和歌山）では平均七〇平方キロ、地域階層化のすすまない北海道では四四二平方キロである。[11] 合併は具体的には諸勢力の対立と妥協によつて行われ、地域の二重性が新しい不整合と摩擦をひきおこす面も多いが、しかしこの平均値は、現在の都鄙共同体の核心規模を間接的には反映していることが、合併以前の町の勢力圏やヨーロッパにおけるバス交通圏（既述）との対比においてもいえるし、一九五二年までにスウェーデンで行われた commune の併合調査結果からも類推しうる。[12]

都鄙共同体は階層的に結合して、制度的には府県にワクづけされる。一九世紀後半、クニや藩を分合配置して成立した府県が、いまではそれらに代つて、独自の個性と共属感情をもつ一大共同体として成長してきたことは注目を要する。府県は別表Ⅸのような六群に大別される。平均面積の大きい群は本州北端の寒い三県と中部山岳地方の二県で、その次に山形・宮城・福島・新潟等残りの東北諸県がつづく。関東地方平野部四県は最小の平均面積をもち、山間部は山梨をも含めてこれらの平野県よりやや平均面積が大きい。残余の県は中位の大きさで、地形・位置関係に対応して変化する。一方、人口は別表のように、行政村の場合に類似して面積と逆比例する。（別表Ⅸ）

各位の地域規模は、このように国内において、一定の秩序をもつてローカルに変化するとともに、国家間において、

群	県	面積	群平均面積	人口密度	群平均密度
41°—39°Br.	青森	9.6	12.0	133	111
	秋田	11.7		112	
	岩手	15.2		88	
39°—37°Br.	山形	9.3	10.5	145	179
	宮城	7.3		228	
	新潟	12.6		195	
	福島	13.7		149	
37°—35°Br. 関東山地	茨城	6.1	5.8	334	251
	栃木	6.4		240	
	群馬	6.3		252	
	山梨	4.5		181	
37°—35°Br. 関東平野	埼玉	3.8	3.3	564	1278
	神奈川	2.3		1053	
	東京	2.1		3074	
	千葉	5.1		422	
中部山岳	長野	13.6	12.0	151	149
	岐阜	10.5		147	

別表Ⅸ　県の規模（面積は 1000km² 単位，人口は1950年）

さらに秩序だつた振幅を示す。国家規模自体七群に分類されることは前述したが、この分類に対応した変化が、その下位組織にもみられる。

まず自生的な地域組織についてみる。ブラッシュは、南西ウイスコンシンを米国（国家規模Ⅳ群）の一サンプルとして、次の比較を試みた。[18] 国家規模Ⅱ群の西ヨーロッパでは、第一次の地域的小中心は三・二キロ—六・四キロはなれた urban village（人口数一〇〇—一、〇〇〇）であるが、ウイスコンシンでは、四キロ—八・八キロはなれた hamlet（一〇〇人以下）である。ヨーロッパでも、Ⅱ′群に属するフィンランドでは、この間隔はさらに大きい。次の中心は、Ⅱ群では六・四キロ—一二・八キロ間隔をなす market town（一、〇〇〇—四、〇〇〇人）、ウィスコンシンでは一二・八キロ—一六キロ間隔の village（五〇〇—九〇〇人）である。フィンランドではこの階層中心は四八キロの間隔をなす。次の中心は、イギリスでは一六キロ—二四キロ間隔の town（五、〇〇〇人）、ドイツでは二〇・八キロ間隔の Kreisstadt（四、〇〇〇人）、または四五・二キロ間隔の Bezirksstadt（一〇、〇〇〇人）であるが、ウイスコンシンでは、この中心はより人口が少く、間隔はより大である。次の中心に至つてはじめて、ウイスコンシンのそれはドイツのそれに間隔の点で類似するに至る（五六キロ）。ところがフインランドでは、この階層中心は九六キロ—一四四キロの間隔で散在するにすぎない。

かかる自生的な地域規模の相違は、別表Ⅹに示すごとく

制度的な行政地域規模の相違に対応している。別表Xの資料は不充分であるが、一応、次の傾向を推定しうる。

(1) 最上位地方行政地域面積は、Ⅳ・Ⅳ′・Ⅱ′・Ⅱ・Ⅰの配列を示し、

(2) その人口は、Ⅳ・Ⅱ・Ⅱ′（Ⅳ′）・Ⅰの配列を示す。[14]

ここで特に注目をひくのは、Ⅳの行政地域規模が国家規模や自生的地域規模に即応した巨大さをもつこと、Ⅱの行政地域面積が、ドイツを除いてⅡ′やⅠと較べてすら矮小で、自生的地域規模に即応しえないことである。Ⅱの国家群の現代的試煉は、ここからも生れてくる。ここでは地域の二重性が複雑なフリクションを起している。[15]

群	国名	最上位地方行政区面積	行政区平均人口（千人）
Ⅳ	ソ連(S. S. R)	1,391,912	11,993
	米国(state)	173,000	3,075
Ⅳ′	ペルー	51,443	338
Ⅱ	ドイツ(provinz)	24,395	3,939
	日本(県)	6,473	1,832
	フランス(département)	6,122	470
	イギリス(county)	2,400	935
Ⅱ′	ユーゴ	42,813	2,628
	フィンランド(landskap)	30,545	388
	スウェーデン(Län)	18,332	260
	ポーランド(voivodships)	16,406	1,314
	スペイン	10,061	572
Ⅰ	ウルグワイ	9,838	122
	チェッコ	6,727	53
	オランダ	2,491	716
	ギリシア(nomoi)	2,457	136
	スイス(canton)	1,651	188

別表X　国別最上位地方行政区域平均面積
（群は，別表Ⅶの国家規模分類による）
Statesmans Yearbook 1951より算出

① 拙稿、前掲地評二八の六。
② 拙稿、土地占居からみた散居の機能、人文研究五の九。
③ F. H. W. Green, Bus Services in the British Isles, Geogr. Rev. 41, 1951.
④ F. H. W Green, Motor-Bus Centres in South-West England considered in Relation to population and shopping Facilities. Transactions and Papers. 14, 1948
⑤ J. B. Fleming, An Analysis of Shops and Service Trades in Scottish Towns, S. G. M. 70, 1954
⑥ 岸本実、地方町の統計的研究、地評二五の八
⑦ 鈴木、前掲書。七八頁
⑧ たとえば、明治六年一小学区人口およそ六〇〇人を以てするという政府の指令が発布され、小学校の乱立を防いだことも、ムラの拡大に大きい影響をあたえた。永島福太郎、明治「学制」と村落、関西学院史学三
⑨ 竹内常行、新潟・富山・石川三県における町村面積と地形並びに人口密度との関係、地評八の七
⑩ 前掲 Demographic Yearbook 分類 b. ab による。
⑪ 昭和三〇年五月二日付朝日新聞、全国都市一覧から算出。礪波諸村では、合併以前から共有した新設中学が合併の場合の

機縁となつた例が多い。

⑫ D. E. Lindstrom, The Changing Rural Community in Sweden, Rural Sociology, 16, 1951。古い共属感情の残っているスウェーデンのムラ commune は、平均人口一、六〇〇人（一九四五年）、五分の一は五〇〇人にみたなかつた。それを一九五二年までに最低二、〇〇〇人に併合する計画がたてられた。即ち、田舎町中心の secondary group organization が最下位の行政単位となつたのである。

⑬ J. E. Brush, The Hierarchy of Central Places in Southwestern Wisconsin, Geogr. Rev. 1953.

⑭ これらについては、前掲 Meeking の論文に多くの示さをうけた。

⑮ 現在、イギリスでは、county 単位では行政円滑をかくため、標準リージョン地区を設け、ここに政府出先機関を設置した（高木鉦作、イギリスのリージョナリズムについて、都市問題四五の一二）。わが国でも道州制が問題となつている。マスコミューニケイションの盛んな現在、新しい共同体運営のためには、当然それに即した空間的ワクづけが必要である。

八 むすび

地域は、二重の構造と合法則的な規模の振幅を示しつつ、空間的階層化の方向へと進化してきた。この関係は、本稿でふれえなかつたがメトロポリタンエリアの膨脹において極限に達する。かかる地域共同体の主体たるべき人間共同体自体、以上の地域関係に密着した発展を経過するのはいうまでもない。地域主義 regionalism とは、かかる観点から、地域組織の再編成によつて、人間共同体機能の円滑化を企てるものにほかならない。さらにこれは発展して、かの「自然改造」へと連続する。

しかし類似した規模と組織をもつにかかわらず、質的に地域構造を異にする場合が少くない。たとえば、類型的にみるかぎり、日本の村落が集落・菜園・水田・山林から構成されているのに対して、西ヨーロッパのそれは、ウェーバーも指摘しているように、集落・菜園・麦畑・牧場（採草地）・山林から成立している。主要生産用地として、一方は水田を、他方は麦畑をもつこと、後者における牧場の存在、双方における山林の機能的ちがい、これらが両者の人間共同体とからみあつて、相互に異質的な地域性をつくりだした事実をも無視できない。この事実が、両者における異つた歴史発展の方向と関連することも否定できないし、それが地域の形態的側面を逆に規定していることも、重要な問題としてなお残されている。また、生活空間の規模が、社会階層のちがいによつて、必ずしも同日に論じえないことも、ここではふれることができなかつた。（一九五〇、八、一五）

multiplied——in short, it has come into its own. This is the so-son (惣村) under the Muromachi Shogunate. But the so-son was still insecure because of the stratification of the population within itself and the interference of the warring magnates. This will explain to some degree the military character of the community.

In this article I aimed to trace the slow and continuous development of the village community and to illustrate it in its proper position under the feudal structure of medieval Japan.

The Geographical Scale of the Community

By

Ichiro Suizu

Between the area and the population of the community there is a general rule and in the mode of combination among the various teritories from the village to the nation there also is a order and a kind of systematization. This article is a more detailed study from the above-mentioned view-point of the foregoing research "The Stratificated Combination of the Areas" which I published in the Geographical Review (vol. 28. No. 5). An approach was made as to the reciprocal relation between the evolution of the territories and their organization and of spontaneous and the institutional communities.

The areas, the landscapes and the nature are the original whole of the human community and I want to pave the way to the "area" as man has once found the 'society".

Irrigation Customs in China

By

Motonosuke Amano

For the growth of the agricultural production water supply is indespinsable and its management is influential for the life of the community. When it is taken up by the public and the communal authority or by the individual the right of the water management comes to the fore. This article is an attempt to describe this as a function of the village community.